『島田洋七の佐賀のがばいばあちゃん』
ロケでも活躍！旧南渓分校

地域も活動も注目度アップ

懐かしい木造校舎で田舎暮らしに触れてもらいたい

―南渓いきいき協議会発足で多久市のグリーンツーリズムが始動―

「農村の魅力を伝えたい、懐かしい木造校舎で田舎暮らしに触れてもらいたい」と、南多久町南渓地区で、グリーンツーリズムの取り組みが始まりました。恵まれた自然やのどかな農村を活かして、住み慣れたふるさとを活性化しようと地域の力が結集したもので、活動の拠点となっているのが今年3月廃校となった旧南渓分校の校舎です。その校舎が、『佐賀のがばいばあちゃん』第2弾のロケ地に決定。注目度が高く、話題性抜群の映画で校舎が再び脚光を浴び、グリーンツーリズム活動のスタートにもいっそうの弾みとなっています。

▲8月19日、南渓いきいき協議会全体会議に集まったみなさん（旧南渓分校にて）

グリーンツーリズムとは…

市民農園、農家民泊、収穫体験、農業・耕作体験、田舎料理体験など自然とふれあう体験を通して、都市と農村の人達がお互いに生きがいや楽しみを味わう交流事業のこと。

市内の南東部に位置する南渓地区で8月1日、『南渓いきいき協議会』が発足しました。

116年続いた南渓分校の閉校によって連鎖する地域衰退の危機感を機運に、「住み慣れたふるさとを、自分たちで元気づけよう」と、話し合いや先進地視察を重ねてきた有志20人が5月に立ち上げた『南渓地区活性化協議会』と行政機関（多久市）とで構成。この日、旧南渓分校で、設立総会を開き、会名や規約、役員、ふるさとづくり構想などを協議し、「知恵と工夫、やる気で創るふるさと再生」をスローガンに、地域を元気にしていく決意を確認しました。

南渓地区には、県内でも珍しいベリー園や果樹園、竹林、転作田を利用した蕎麦の栽培などがあり、自然の中でできる体験メニューが豊富。旧分校を核に、農業体験、田舎料理や加工品づくり体験教室など、都市部住民との交流を通して、耕作放棄地の減少や地域高齢者の生きがいづくりなどにつなげていきます。

この取り組みは、県内で3か所が選定された、国が進める農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル地区に選ばれ、多久市が描くグリーンツーリズムのモデル地区として設定。今後、農業の大切さや地域にある資源の再発見をしながら、市内それぞれの地区の特性を活かした組織づくりを全域で行う計画です。

『南渓いきいき協議会』の角田一彦会長は「人や地域の魅力を大切に、みなさんと協力しながら、地域活性化に向けた活動を進めたい」と話されました。

■協議会の立ち上げに向けて会議や研修が続いている頃に飛び込んできたのが、映画『島田洋七の佐賀のがばいばあちゃん』ロケ地の話題。木造校舎を探していたスタッフの目に止まり、監督の洋七さんとスタッフが8月5日、市役所を訪れ、横尾市長を表敬訪問しました。横尾市長が「涙、涙の閉校式でしたが、今回の件で、地域では笑顔、笑顔になると思います」と伝えると、監督は「木造校舎は映画のイメージにピッタリ。地元の子供たちにもエキストラで参加してもらうし、これをいい機会にみんなのコミュニティが活性化するといいですね」と話し、ばあちゃんとの思い出や野球の話題と共に、「佐賀や九州を盛り上げたい。この映画もまずは九州が先」と九州で来年、先行上映する計画も披露されました。
なお、旧南渓分校での撮影は8月末で、小学校時代のシーンが撮り終わっています。

■メガホンを取る島田洋七監督（右）と映画ロケに協力を示す横尾市長